

ガザの悲しみ

小田切 拓

ビデオ・ジャーナリスト

「なぜ、本当のことが伝えられないのだろうか？」
常々感じていた疑問の答えを探すため、パレスチナ自治区・ガザの取材を始めた。現在は、テレビディレクターをしていた経験を生かし、難民キャンプの日常を撮影している。

ガザは、沖縄によく似ている。イスラエルによって土地を奪われたパレスチナ人が暮らす自治区の内部には、あちこちにイスラエル軍の拠点がある。そこから連日、パレスチナ側へ攻撃が加えられているのだ。本来、危険の芽などほとんど存在しないはずのパレスチナ人居住区で、惨劇が繰り返される構図のなかに、意図的に作り上げられた“紛争”が見え隠れする。無機質な数字や当局発表の引用では伝えきれない痛みが、ガザには溢れている。

最前線の街で人命救助にあたる救急隊員の取材をしていた時のこと。緊急事態に備える隊員たちの詰め所に、その日唯一の出動要請が入った。現場に急行すると、路上に人だかりができていた。人垣のなかでは、初老の男性がうずくまっていた。時おり激しく震えるが、深刻な外傷は見受けられない。隊員は状況を把握すると、その男性の足に添え木をし病院に運んだ。大きな惨事が起きることを望んでいたのだろうか、同行取材をしていたフランス人の新人女性ジャーナリストは救急車のなかで隊員に幾つか質問をし、ガツカリしたように黙りこくってしまった。

3日しかない滞在期間の1日を「ムダ」にした思いだったのだろう。

私は、治療が最優先の場に居あわせていることを申し訳なく感じつつ、撮影を続けた。男性に遠めからカメラを向けると、若い隊員が、男性の額に掌を被せながら、何事か論すように語りかける。男性の目頭が微かに湿っているように見えた。

「あの人はね。傷が痛んで泣いていたんじゃない。心に傷を負って立ちあがれなかったんだ」。任務が終わった後に、その隊員が教えてくれた。

男性は、公衆の面前で石を投げつけられたのだという。犯人は実の息子。絶望と生活苦に喘ぐ毎日への苛立ちが、父親へと向けられたのだ。

ふと、事情を説明してくれた隊員の顔をのぞくと彼もまた目を赤く腫らしている。実はこの隊員自身、親戚や知人を20人以上も失っていた。

私の講演会場を訪れてくれた方から、戦時中の話をうかがったことがあった。信用できる情報など

手に入らなくとも、事実の捏造や危機の到来についてはすぐに察しがついたという。現地でカメラを回していると、確かに、麻痺していた感性が蘇ってくるのがわかる。

足の裏に伝わってくる荒れた道のゴツゴツとした感覚。乾いた空気。手を握った時のグニュっとした感触。五感でしかわからないものがある。ガザに通うようになって5年余り。撮影を始めて1年半。本来伝えられるべき“占領”の実態と、人いきれに溢れた日常を、やっと表現できるようになってきた。

